The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本における「国民国家」の発現と「儒学知」の変容
Author(s)	中村, 春作
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名　中村春作（なかむら しゅんさく）

博士の専攻分野の名称　博　士（文　学）

学位記番号　第　17368　号

学位授与年月日　平成14年12月5日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文名　**日本における「国民国家」の発現と「儒学知」の変容**

論文審査委員　（主査）
教　授　中村　生雄

（副査）
教　授　川村　邦光　　教　授　杉原　　達　　京都大学教授　辻本　雅史

論文内容の要旨

本研究は、近年の「国民国家」論からの問題提起に思想史研究の側から応答するために、ひろく東アジア思想史の構想を展望することによって日本近代における「儒学知」の変容のありさまを解明し、そこでの「国民」意識の形成を問い直そうとする試みである。全体は序章ならびに第一章から第五章までの本論と、それを補足する2編の補論からなっており、分量的には400字詰め原稿用紙に換算して630枚ほどである。

本論文で申請者は、「国民国家」の成立という歴史過程との関連において、近世日本社会の知的制度の根底であった儒学的な「知」がどのように変容し、近代的な「知」の編成に向けてどのように組み替えられていったのかについて、近代化論や対西洋のナショナリズムの問題としてとらえる従来の定型的な解釈を批判しつつ、理論的・方法的な考察を積み重ねていく。またそのことによって、これまで儒教文化圏や漢字文化圏の名のもとで安易に言及されてきた東アジアの思想史を、19世紀東アジア各地域における知識人社会がそれぞれの「国民国家」形成過程のなかでどのような知的経験をとげ、彼らの「教養」の内容がどう変化し、それが「国民」の形象化をどのようにうながしたのかという観点から検証しなおし、新たな問題構成と方法的な視座を提出しようとする。

まず「第1章」の「いま、『儒教』を論じるということ」では、1980年代の戦後体制の崩壊と世界システムの新たな模索の時期において、東アジア世界を「儒教世界」として位置づけ、その歴史的・思想史的な意義を論ずる方法と可能性が吟味される。そこでは、東アジア地域の経済発展を儒教文化圏によって説明することの恣意性を指摘する一方で、儒教をたんなる教義や学説としてではなく、当該社会に生きるリアルな教えと見なす視点が必要であり、またそれを一つの文化構造として論じる場が成立してきたことが確認される。それをふまえて「第2章」の「『知識人』論の視界」では、このような「儒学知」を実質的に担っていた社会内存在としての近世日本の知識人のありかた、および、それが18世紀～19世紀に生じた「知」の編成の変容を通じて、明治初期の啓蒙的知識人の成立につながっていく過程が、主に同時代のドイツにおける「教養市民層」の成立という事態との対比のもとで検討される。それは、従来のように、これを江戸期からの伝統的学問と西洋思想との折衷という視点で理解する方法や、前者のなかに内在した「近代」を遡及的に読み込む方法とは異なり、当該期の儒学知の変容を「国民的教養」の形成にかかわって解明する歴史社会学的方法によるものであることが表明される。

「第3章」の「『均質な知』と江戸の儒教」では、近世知識人の儒学的教養のありかたが近代の漢学的な「知」の編成へと組み替えられていく重要な契機として、「読書」と「素読」の問題がとりあげられる。すなわち、寛政期以降の折衷的儒学のひろまりとともに全国規模で展開した公教育機関での素読という教授法と教育システム、およびそ

れに並行して展開した出版文化の隆盛と大衆的な読書の拡大現象が、近代的な「国民」とその「教養」の成立のための知的経験としてどのような意義を有していたかが解明される。つづく「第４章」の「変容する『儒学知』・『国民』像の模索」では、近世後期の反徂徠学的知的潮流のなかで、懐徳堂とその影響下にある知識人によって提起された知の共同性をめぐる問題が、ハーバーマスの「公共圏論」を参照することによって再検討され、「第５章」の「『国民』形象化と儒教表象」では、1930 年代の新たな帝国主義段階におけるナショナルな儒教言説の再構成として西晋一郎と橘樸の場合がとりあげられ、そこでは、中国の儒教・道教の古典思想がその中国色を脱色したうえで新たな「帝国」の言説として再編成されていった点が強調される。

論文審査の結果の要旨

本研究は、従来暗黙の棲み分けが行なわれてきた近世儒学思想史と近代政治思想史とを、時代区分や思想家の系譜によって分離するのではなく、相互に緊密にかかわりあう一連の動きとして把握しようとする意図にもとづいている。したがって、個々の思想史的考察よりもその考察のもつ方法的な意味が重要視される。本論において、徂徠学と反徂徠の学派的・思想史的対抗関係が問題とされる場合も、明六社知識人の学問観や儒教伝統との距離が問われる場合も、それは従来の研究史を修正したり欠落を埋めるためのものではなく、これまでの研究がそこに見出すことのなかった思想史上の問題を発見するための作業であると言わなければならない。そのような積極的な意図と目的が、「近代化」や「日本化」といった定型的主題を基本枠組みとして構想されていたこれまでの思想史研究の停滞状況を打ち破り、そこに通底するものとしてナショナルな「知」の欲望の軌跡を見出していく視線は明解である。

むろんその新しさと明解さとは裏腹の関係で、今後の課題として残されているものも多い。まず、扱われるトピックが上述の三つの領域に限定されていることから、各章での論理構成が単純化されすぎ、また、対象相互の歴史的・思想的関連が十分説明されているとは言いがたいところがある。たとえば、寛政異学の禁以降の素読吟味を理由に「素読」の形式が一般的に成立し、「均質な知」が成立したとするように、まま性急な解釈が散見する。また、明治期の儒教ナショナリズムの検討においても、福沢諭吉と西周だけでなく、元田永孚や西村茂樹ら正統的漢学者をも視野に収めた総体的な考察が必要であろう。

とはいえ、思想内容を内在的・追体験的に再構成する従来の思想史のありかたを拒否し、「言説生成のメカニズム」の解明に重点を置いた新たな思想史への方法的な挑戦において、本研究の寄与はきわめて大きく、現在やや上すべりの感のある国民国家論に実質的な裏づけをもたらす点でも有意義であり、よって、これを博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。